

調査報告

沖縄本島北部地域における自然環境観光資源に対する選好度に関する基礎調査 —観光目的ならびに行楽目的の来訪者を対象として—

伊良皆 啓¹⁾, 田代 豊¹⁾, アリ ファテヘルアリム¹⁾

Preference of Nature-related Tourism Attractiveness in the Northern Area of Okinawa Island

Hirono Iramina, Yutaka Tashiro, Fathelalem F. Ali

1. はじめに

沖縄本島北部地域は、固有の生態系が維持されるとともに特徴的な地形が残る自然豊かな地域として認識され、県内外から多数の来訪者を受け入れている。このような自然環境を良好な状態で保全するとともに観光資源として適切に活用することは、沖縄の観光産業の自立かつ持続的発展のために重要である。そのためには、第一にそれら自然環境の詳細な現状を把握・評価し、共通に認識できるような形とすることが必要である。しかしながら、個々の自然環境観光資源の存在や状態については科学的で網羅的な資料が充分ではない。このため、場所によってはその価値が認識されないまま、許容を超えた観光利用や開発などによって自然環境や観光資源が劣化させられる事例も存在する。

このようなことから、筆者らは沖縄本島北部地域における自然環境観光資源の分布とそれらの状態、利用状況等について調査し、データベース化に関する研究に取り組んだ。本稿は、その研究の一環として行った調査に関する報告をまとめたものである。

研究対象地は自然豊かな地として知られ、観光旅行者や行楽客が足を運ぶことでも知られている。このような自然はその雄大さ、希少性や稀有さなどにより人々を魅了し、各地においても観光旅行者や行楽客を惹き付け、圏域外から旅費や時間を費やして足を運ばせる誘客要因のひとつとなっている¹⁾。観光研究の分野では、このような資源は観光資源と呼ばれ、宿泊やレクリエーションを提供する観光施設と併せて観光対象^{註1)}とされている。これら観光資源、観光施設、観光対象の関係は、図1の

モデルにて示される²⁾。観光資源は、一般的に自然観光資源、人文観光資源、複合観光資源に区分され³⁻⁵⁾、その内容は表1のとおりである³⁾。また、観光資源は「観光行動」を生起させるものであるとされていること⁶⁾や観光資源が存在しなければ観光活動は生じない⁷⁾ことから、観光デスティネーション^{註2)}の形成には欠かせないものであるといえる。しかしながら、過度の利用に



図1：観光資源・観光対象・観光施設の関係モデル
出所：尾家建生，2009，観光資源とアトラクション，大阪観光大学紀要，9：14.

表1：観光資源の分類

自然観光資源	山岳，高原，原野，湿原，湖沼，峡谷，河川，滝，海岸，岬，島，岩石，地形・地層，洞窟，温泉，動物，植物	有形資源
	気象，自然現象	無形資源
人文観光資源	史跡，社寺，城跡・城郭，庭園，橋，公園，碑・像，建造物，動植物園，博物館・美術館，水族館，テーマパーク	有形資源
	伝統行事，イベント，民族，無形文化財	無形資源
複合観光資源	都市，農山漁村，郷土景観，田園景観，歴史景観，自然景観，都市景観，リゾート	

出所：奈良繁雄，1994，観光対象と商品，塩田正志・長谷政弘編著，観光学，同文館，56. の一部を加筆・修正

¹⁾ 名桜大学国際学群 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1, Biimata, Nago, Okinawa 905-8585, Japan

よる変容や他の目的による開発等により、観光資源の魅力低下や観光資源そのものが消滅してしまうことも珍しいことではない。

一方、観光資源単体での誘客は不可能であり、潜在的な観光資源の開発と宿泊施設に代表される観光サービス施設の立地が相俟って、顕在的な観光資源と成り得て誘客が可能となるのである。さらに、観光資源は、観光旅行者の活動に供されるだけでなく、観光対象の素材でありそれ自身が誘引力⁸⁾を有していることから、潜在・顕在を問わず観光デスティネーションの宣伝や広告において利用されていることは様々な事例からも明らかであり、観光デスティネーションのイメージ形成において非常に重要な役割を果たしている。

これらの観光資源に関する研究については、住民や通学者を被験者とした景観やランドスケープに関する多様な研究が行われているが、利用者である観光旅行者や行楽客がどう観光資源を捉えているのかという調査・研究についてはさほど多くはない。観光資源は、最終的に観光旅行者の判断に委ねられること⁷⁾から、観光資源の発掘・評価には外部の視点も不可欠であり⁹⁾、重要である。また、沖縄の観光資源を対象とした類似する研究として、兪ら（2002）による沖縄と北海道の大学生を対象とした沖縄における観光活動・観光資源の評価に関する研究¹⁰⁾、安里ら（2005）の沖縄本島におけるイメージの形成過程と環境と風景の変容に関する研究¹¹⁾、糸満ら（2005）の住民の視点から地区景観を分析した研究¹²⁾などが挙げられる。しかしながら、沖縄本島北部地域における個別の観光資源を研究対象とした研究は未だ行われていない。これらのことを踏まえ、本稿においては、沖縄本島北部地域に存する個々の潜在的観光資源について観光旅行者ならびに行楽目的の来訪者を対象とした選好度に関する調査を通して得られた知見の整理を試みる。

2. 調査概要

本調査は、沖縄本島北部地域における潜在的な自然環境観光資源に対する観光旅行者および行楽客の選好度を明らかにすることを目的にしたものである。ここでいう、観光旅行者とは日常の生活圏外の地を1日以上1年未満に観光目的の旅行で訪れる者^{13, 14)}を指し、一方、行楽客とは、楽しみや遊び、日帰り観光レクリエーションなどの目的で近郊を訪れる者¹⁾を指している。本稿においては、沖縄県外在住者で来訪目的を観光と回答したものを観光旅行者として分類し、沖縄県内に在住し来訪目的を行楽と回答したものを行楽客として分類した。主な調査内容は、回答者の属性、観光・行楽活動の内容等、潜在的な観光資源の選好に関するものである。なお、調査は平成22年度（以下、第1回調査とする）の実施に加え、平成23年度（以下、第2回調査とする）には追加調査を行った。

表2：沖縄県内の自然環境資源の一覧を掲載した文献

文献名	発行者	発行年
第3回自然環境保全基礎調査自然景観資源調査報告書	環境庁	1989
沖縄県環境利用ガイド	沖縄県	1992
ふるさと自然百科	沖縄県教育委員会	1992
沖縄の文化財Ⅰ：天然記念物編	沖縄県教育委員会	1993
沖縄の文化財Ⅱ：史跡・名勝編	沖縄県	1994
自然環境の保全に関する指針：沖縄島編	沖縄県	1998
沖縄県地質鉱物緊急事態調査報告書	沖縄県教育委員会	2000
自然環境の保全に関する指針：沖縄島周辺諸島及び大東諸島編	沖縄県	2000

表3：第1回選好度調査対象観光資源

所在地	観光資源名	所在地	観光資源名
大宜味村	謝敷海岸のビーチロック、平南川のター滝、安根の枕状溶岩、津波のビーチロック、謝名城城址、喜如嘉の七滝	今帰仁村	運天の化石層、古宇利島の番所跡、古宇利島トケーバル海岸、今泊・諸志のフクギ屋敷林、テースパマ、佐田浜海岸、トースカ、イジヌイヤーヤ、メーダガニクパマ
恩納村	みゆきホテル左海岸、真栄田の海食岩、前兼久漁港・ヒートゥー島、山田城址、フェーレー岩、恩納奥海岸	名護市	天仁屋海岸、底仁屋の横臥褶曲、天仁屋北海岸、嘉陽海岸、愛楽園奥海岸、天仁屋パン崎の褶曲、源河川、瀬嵩海岸の褶曲
宜野座村	潟原、別荘村海岸	東村	デークルマイ海岸、イノガマ海岸
国頭村	辺土名の沈水ビーチロック、伊地の鉱山跡、比地の大アカギ、安波のサキシマスオウノキ、宇佐浜、アダンビーチの隣の海岸、ヒラフー海岸、深川河口、宇嘉川	本部町	大石原のアンモナイト
		伊平屋村	ビーチロック、ヤーヘ岩対岸のオリストストローム、伊平屋島南部の砂嘴と景観

2.1 第1回調査内容

調査の対象とする観光資源の選定に関しては、2段階に分けて行った。最初に、表2に示される文献を用いた先行調査の結果¹⁵⁾に基づき、i) 調査対象地域の風景の特徴との関連性、ii) 地質・地形形成史の中で、重要な地質イベントや地形区分との関連性、iii) 近接サイトとの関連性の有無、iv) 現地確認の結果、資源としての価値が評価される地点、v) エリア全体としてのバランスが既に広く認知されているものを条件とし、沖縄本島北部地域内の151の観光資源を抽出した。抽出された資源数が多いことから、次に、①既に観光スポットとして広く認知されているもの、②既に消失・変質したもの、③資料が不足し地点を特定できないもの、④明らかに利用できない要素がないものを除外し、表3に示された46の潜在的な観光資源を本調査の対象として選定した。

以上により抽出した観光資源に関して、観光旅行者と行楽客が比較的多く立ち寄ると想定される施設である名護市許田に存する道の駅許田やんばる物産センターをアンケートの調査の実施場所に設定した。アンケート実施については、調査員が依頼後にこれらの対象観光資源の画像と簡単な概要を提示する街頭調査法により回答収集を行った。

2.2 第2回調査内容

第2回の調査に際して、第1回調査で抽出した潜在的な観光資源以外に、各地域の字誌などの郷土資料に記載されている地域・地点について調査地点の追加抽出を続け、充実を図った。第2回の調査にあたり、参照した文献・資料数を表4に示した。対象の抽出は、前回調査と同様に2段階に分けて行った。最初に、第1回調査と同様な観点から56地点を抽出し、その後、同様な基準により表5に示される14地点を対象を限定し、アンケート調査の対象観光資源として選定した。なお、これらの地点

の学術的な意義や利用の妥当性等については、県内の地理学、地学および観光学の専門家からなる琉球列島ジオサイト研究会の監修を受けた。

本アンケート調査は、第1回調査と同様に観光旅行者と行楽客両者の立ち寄りが多い道の駅許田やんばる物産センターにおいて実施した。調査方法に関しては、前回調査同様に調査員が対象観光資源の画像と概要を提示したうえで回答してもらう街頭調査形式で行った。

表4：調査地域・地点の追加選定のため参照した文献数

市町村	参照文献数	市町村	参照文献数
伊 江 村	5	金 武 町	9
伊是名村	4	国 頭 村	19
伊平屋村	5	今帰仁村	14
大宜味村	14	名 護 市	45
恩 納 村	8	東 村	11
宜野座村	14	本 部 町	24

表5：第2回調査に追加した観光資源

所在地	観光資源名	所在地	観光資源名
大宜味村	ムター（六田原）からの展望		ユッパ浜
恩 納 村	アボガマ	国 頭 村	ユッピー浜とフパダチ浜
	ブルシ・オージ（扇）浜		与那の湧泉群
宜野座村	ス ン ブ ク バ ル（下袋原）海岸	東 村	シーゾーグムイ
	松田のメーガー（前川）		川田のサキシマスオウノキ
名 護 市	久志有津川のヒラ滝	本 部 町	ワルーミ
	真喜屋のフクガー滝		スーパイワダグチ

表6：有効回答者の属性

a) 第1回調査における回答者属性

性 別	男性 (45.0%)、女性 (54.0%)、無回答 (1.1%)
年 代	10歳以下 (0.6%)、10代 (10.5%)、20代 (22.3%)、30代 (25.3%)、40代 (15.8%)、50代 (12.4%)、60代 (9.2%)、70代以上 (3.9%)
居 住 地	沖縄県内 (55.9%)、北海道 (1.1%)、東北地方 (0.4%)、関東地方 (17.8%)、中部地方 (11.8%)、近畿地方 (7.5%)、中国地方 (1.7%)、四国地方 (1.1%)、九州地方 (1.7%)、海外 (0.9%)、無回答 (0.2%)
訪問目的	観光（修学旅行を含む）(41.9%)、行楽 (57.4%)
同 行 者	一人で (2.1%)、夫婦二人で (22.5%)、子供連れ家族で (16.5%)、三世代家族で (3.2%)、その他家族で (両親等と) (11.1%)、カップルで (5.6%)、友人・知人と (23.1%)、仕事仲間と (6.6%)、その他 (2.4%)、無回答 (6.9%)
移動手段	レンタカー (29.0%)、観光バス (8.0%)、タクシー (4.5%)、自家用車 (56.5%)、その他 (1.9%)
沖縄への来訪回数	初めて (36.7%)、2回 (19.9%)、3回 (8.7%)、4回 (5.6%)、5回 (6.1%)、6～10回 (7.1%)、10回以上 (13.3%)、無回答 (1.5%) ※県外在住者のみに限定した設問

b) 第2回調査における回答者属性

性 別	男性 (43.7%), 女性 (56.3%), 無回答 (0%)
年 代	10代 (4.3%), 20代 (31.2%), 30代 (24.8%), 40代 (12.2%), 50代 (11.1%), 60代 (12.2%), 70代以上 (3.9%), その他 (0.1%)
居 住 地	沖縄本島中南部 (35.9%), 県内離島 (0.1%), 北海道地方 (3.7%), 東北地方 (2.3%), 関東地方 (26.6%), 中部地方 (8.6%), 近畿地方 (12.7%), 中国地方 (2.7%), 四国地方 (2.6%), 九州地方 (4.2%), 海外 (0.2%), 無回答 (0.4%)
訪問目的	観光 (修学旅行を含む) (64.1%), 行楽 (35.6%)
同 行 者	一人で (2.0%), 夫婦二人で (22.2%), 子供連れ家族で (17.4%), 三世代家族で (6.1%), その他家族で (11.3%), カップルで (7.3%), 友人・知人と (24.1%), 仕事仲間と (5.6%), 地域団体や趣味などのサークルで (2.7%), その他 (1.1%)
移動手段	レンタカー (60.1%), 観光バス (2.6%), タクシー (1.8%), 自家用車 (33.7%), その他 (1.7%)
沖縄への 来訪回数	初めて (27.9%), 2回 (23.3%), 3回 (14.7%), 4回 (8.2%), 5回 (5.3%), 6回から10回 (7.4%), 10回以上 (9.5%), 無回答 (1.3%) ※県外在住者のみに限定した設問

2.3 回答者の属性

第1回調査は平成22年11月下旬から12月上旬にかけて行い、609票の回収を得た。これら回収票のうち、来訪目的、居住地、宿泊先等を元に補正を施し、本調査でターゲットとする観光・行楽目的の来訪者の回答に限定したところ、467の有効回答を得た。第1回調査によって得られた観光旅行ならびに行楽目的に該当する回答者の属性を表6のaに示す。男女構成比はほぼ同数、年代構成は30代、20代の順で多く、両者を合わせると半数近くに達する。居住地に関しては県内約56%、県外44%の構成比であり、県外では関東、中部、近畿の居住者が比較的多い。訪問目的については、観光目的（修学旅行を含む）が41.9%、行楽目的が57.4%であった。県外在住者の沖

縄への来訪回数については、初めて (36.7%)、2回目 (19.9%)、10回以上 (13.3%) が上位となり、沖縄県発表の同年度の観光客の来訪回数¹⁶⁾とは異なる傾向が示された。なお、行楽客も調査の対象としていることから、来訪回数に関する設問については県内在住の選択肢を設けており、251件の回答が寄せられ、有効回答の46.3%を占めた。

第2回調査では、平成24年2月から3月にかけての12日間で992票の回収が得られ、そのうち来訪目的や居住地等により調査目的に該当する回答に限定したところ、817の有効回答が得られた。第2回調査によって得られた回収分から、該当する回答者の属性を表6のbに示す。男女構成比はやや女性が多く、年代構成は30代、20

表7：観光旅行者および行楽客の潜在的な観光資源に対する選好度

a) 第1回調査結果

所在地	観光資源名	主要構成要素	回答数	選択率 ^{註3)}
大宜味村	謝敷海岸のビーチロック	岩・眺望	16	3.4%
	平南川のター滝	滝・河川	242	51.9%
	安根の枕状溶岩	岩・海岸	25	5.4%
	津波のビーチロック	岩・眺望	81	17.4%
	謝名城城址	遺跡・眺望	91	19.5%
	喜如嘉の七滝	滝	80	17.2%
恩納村	みゆきホテル左海岸	海岸・砂浜	92	19.7%
	真栄田の海食岩	海岸・岩	51	10.9%
	前兼久漁港・ヒートゥー島	海岸・遺跡	52	11.2%
	山田城址	遺跡・洞穴・湧泉	77	16.5%
	フェーレー岩	岩	47	10.1%
	恩納奥海岸	海岸	65	13.9%
宜野座村	潟原	海岸・干潟	56	12.0%
	別荘村海岸	海岸・岩	19	4.1%
国頭村	辺土名の沈水ビーチロック	岩・海中	173	37.1%
	伊地の鉾山跡	遺跡	29	6.2%
	比地の大アカギ	植物	112	24.0%
	安波のサキシマスオウノキ	植物	106	22.7%
	宇佐浜	海岸・眺望	60	12.9%

所在地	観光資源名	主要構成要素	回答数	選択率 ^{註3)}
国 頭 村	アダンビーチの隣の海岸	海岸・岩	42	9.0%
	ヒラフー海岸	海岸・眺望	6	1.3%
	深川河口	海岸・河川	39	8.4%
	宇嘉川	河川・海岸	153	32.8%
今帰仁村	運天の化石層	化石出土地・地層	29	6.2%
	古宇利島の番所跡	遺跡・眺望	47	10.1%
	古宇利島トケーバル海岸	海岸・岩・砂浜	109	23.4%
	今泊・諸志のフクギ屋敷林	植物・伝統的集落	86	18.5%
	テーヌパマ	海岸・岩・砂浜	36	7.7%
	佐田浜海岸	海岸・砂浜	103	22.1%
	トーヌカ	鍾乳洞	80	17.2%
	イジヌイヤーヤ	海岸・鍾乳洞	131	28.1%
	メーダガニクパマ	海岸・岩	18	3.9%
名 護 市	天仁屋海岸	海岸・河川	43	9.2%
	底仁屋の横臥褶曲	地層・地形	41	8.8%
	天仁屋北海岸	海岸	14	3.0%
	嘉陽海岸	海岸・砂浜	16	3.4%
	愛楽園奥海岸	海岸・砂浜	19	4.1%
	天仁屋パン崎の褶曲	地層・地形・海岸	15	3.2%
	源河川	河川	244	52.4%
	瀬嵩海岸の褶曲	海岸・岩・地層	47	10.1%
東 村	デークルマイ海岸	海岸	8	1.7%
	イノガマ海岸	海岸	26	5.6%
本 部 町	大石原のアンモナイト	化石出土地・海岸	69	14.8%
	ビーチロック	海岸・岩	45	9.7%
伊平屋村	ヤーヘ岩対岸のオリストストローム	海岸・岩・景観	44	9.4%
	伊平屋島南部の砂嘴と景観	海岸・砂浜・景観	215	46.1%

※複数回答

b) 第2回調査結果

所在地	観光資源名	主要構成要素	回答数	選択率 ^{註3)}
大宜味村	ムター（六田原）からの展望	眺望・景観	257	31.5%
恩 納 村	アボガマ	海岸・岩	346	42.4%
	ブルシ・オージ（扇）浜	海岸・岩・砂浜	115	14.1%
宜野座村	スンプクバル（下袋原）海岸	海岸・砂浜・地層	139	17.0%
	松田のメーガー（前川）	鍾乳洞・河川	341	41.8%
国 頭 村	ユッパ浜	海岸・砂浜	214	26.2%
	ユッピ浜とフバダチ浜	海岸・砂浜	246	30.1%
	与那の湧泉群	湧泉	183	22.4%
	久志有津川のヒラ滝	滝・河川	444	54.4%
名 護 市	真喜屋のフクガー滝	滝・河川	332	40.7%
	シーゾーグムイ	河川・植物	255	31.3%
東 村	川田のサキシマスオウノキ	植物	448	54.9%
	ワルーミ	岩・海岸・眺望	479	58.7%
本 部 町	スーパイワダグチ	海岸・岩・眺望	332	40.7%

※複数回答

代の順で多く、両者を合わせると半数以上を占める結果となった。居住地に関しては、県内約36%、県外約64%の構成で、第1回調査とは異なる比率となった。県外では関東、近畿、中部地方からの来訪者が比較的多いことが示された。来訪目的については、観光（修学旅行を含む）64.1%、行楽35.6%の割合であった。県外在住者の

沖縄への来訪回数については、初めて（27.9%）、2回目（23.3%）、10回以上（9.5%）が上位の比率となり、第1回調査と同様に、沖縄県による同年度の調査結果¹⁷⁾とは異なる傾向が示された。なお、第1回調査と同様に来訪回数の設問に県内在住との選択肢を設定したところ292件の回答が寄せられ、有効回答の35.8%に達した。

2.3 観光旅行者・行楽客の観光資源に関する選好度

北部地域における潜在的な観光資源について、個々の観光資源の画像と概要を提示して訪れてみたい資源の選択を求め、得られた回答を集計した結果が表7のaとbである。なお、訪れてみたい資源の選択の際、複数回答を可とした。

第1回調査において得られた結果から、回答の多かった上位10の資源は、源河川、平南川のター滝、伊平屋島南部の砂嘴と景観、辺土名の沈水ビーチロック、宇嘉川、イジヌイヤーヤ、比地の大アカギ、古宇利島トケーバル海岸、安波のサキシマスオウノキ、佐田浜海岸であった。調査対象とした観光資源のうち、選択率が5割を超えるものは、源河川と平南川の2つであり、河川に関する選好が高い傾向にある。しかしながら、選択率に着目すると、リストアップした46の資源のうち回答の多かった上位5つの資源は3割以上、上位10の資源まで範囲を広げると2割強の選択率であり、興味・関心が分散しているといえる。

第2回調査では、本部町のワルーミ、東村川田のサキシマスオウノキ、名護市久志有津川のヒラ滝、恩納村のアポガマ、宜野座村松田のメーガー（前川）が、回答の多い上位5つの資源であった。対象となった16の資源の

うち、上位10の資源は3割以上の選択率となり、第1回目の調査結果に比すると高い選好率が示された。第2回調査結果においては、一定の種類の観光資源が好まれるような傾向は特にみられなかった。

3. 考察

本調査の対象として選定した潜在的な観光資源について、第1回調査結果と第2回調査結果の比較、観光資源の主要構成要素や来訪目的別の違いなどの観点から考察を行う。

第1回調査結果ならびに第2回調査結果ともに、河川に関する観光資源が他の資源よりも選択される傾向が示された。また、回答数が多い資源でも、両調査において最大5割程度の選択率であり、大多数の選好を得ているとはいえない。さらに、両調査結果のうち、回答が多かった上位10の観光資源に限定すると、第1回調査結果は第2回調査結果に比較して、選択率が低い傾向が示され、若干であるが選択率に差異がみられた。このことは、第1回調査でリストアップした観光資源の数が後者の約3倍と多く、画像を確認してから回答に時間を要したことが影響しているのではないかと推察される。

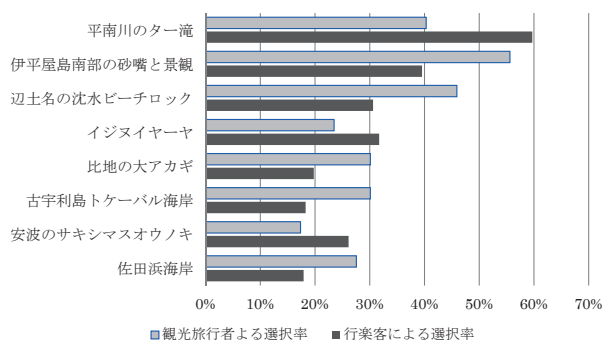
表8：来訪目的別による観光資源選定率

a) 第1回調査結果（回答数が多い順10項目に限定）

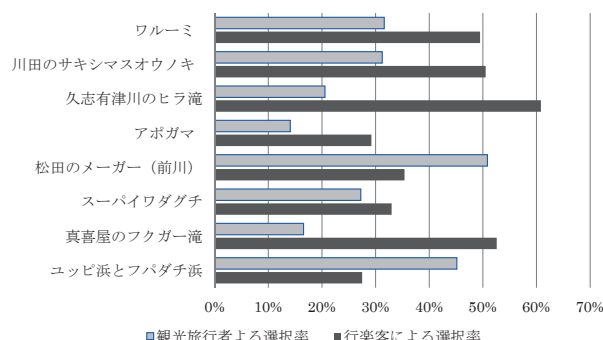
観光資源名	主要構成要素	選択率	観光旅行者による選択率 ^{註4)}	行楽客による選択率 ^{註5)}
源河川	河川	52.4%	52.6%	52.2%
平南川のター滝	滝・河川	51.9%	40.3%	59.7%
伊平屋島南部の砂嘴と景観	海岸・砂浜・景観	46.1%	55.6%	39.6%
辺土名の沈水ビーチロック	岩・海中	37.1%	45.9%	30.6%
宇嘉川	河川・海岸	32.8%	32.1%	33.6%
イジヌイヤーヤ	海岸・鍾乳洞	28.1%	23.5%	31.7%
比地の大アカギ	植物	24.0%	30.1%	19.8%
古宇利島トケーバル海岸	海岸・岩・砂浜	23.4%	30.1%	18.3%
安波のサキシマスオウノキ	植物	22.7%	17.3%	26.1%
佐田浜海岸	海岸・砂浜	22.1%	27.6%	17.9%

b) 第2回調査結果（回答数が多い順10項目に限定）

観光資源名	主要構成要素	選択率	観光旅行者による選択率 ^{註4)}	行楽客による選択率 ^{註5)}
ワルーミ	岩・海岸・眺望	58.7%	31.6%	49.5%
川田のサキシマスオウノキ	植物	54.9%	31.2%	50.5%
久志有津川のヒラ滝	滝・河川	54.4%	20.6%	60.8%
アポガマ	海岸・岩	42.4%	14.1%	29.2%
松田のメーガー（前川）	鍾乳洞・河川	41.8%	50.9%	35.4%
スーパイワダグチ	海岸・岩・眺望	40.7%	27.2%	33.0%
真喜屋のフクガー滝	滝・河川	40.7%	16.6%	52.6%
ムター（六田原）からの展望	眺望・景観	31.5%	28.8%	32.0%
シーゾーグムイ	河川・植物	31.3%	34.1%	35.7%
ユッピ浜とフバダチ浜	海岸・砂浜	30.1%	45.1%	27.5%



a) 第1回調査における来訪目的別選択率



b) 第2回調査における来訪目的別選択率

図2：来訪目的別選択率

次に、観光資源の構成要素についてであるが、砂浜に隣接する海岸線の選好度が高いことが予想されたが、特にそのような結果は示されなかった。一方、両調査にを通して、河川に関する観光資源が海岸に関する観光資源より上位に位置している傾向が見受けられた。しかしながら、河川によっては選定率が低いものもあり、一概に河川系の観光資源が海岸系観光資源より選好されているとは言い難い。今後、この点に関して精査する必要があるといえる。さらに、両調査において、植物系の観光資源であるアカギやサキシマスオウノキが上位であることと鍾乳洞系の観光資源の選択率が比較的高いことは、特徴的な結果であった。

各調査において回答が多かった上位10の資源に限定して、来訪目的によるクロス分析の結果を示したものが表8のaとbである。当該観光資源に対する選好を観光目的と行楽目的によって区分し、各目的の有効回答数で除したものをそれぞれ観光旅行者による選択率と行楽客による選択率として示した。これらの観光目的ならびに行楽目的の回答者の属性が県外在住者と県内在住者区分されることから観光の定義^{註6)}に照らすと、それぞれの観光資源に対する観光旅行者による選好率と行楽客の選好率と言い換えることが可能である。

第1回調査の結果について、観光旅行者ならびに行楽客の選択率で5ポイント以上の差があったものが図2のaである。観光旅行者の選択率が行楽客の選択率を10ポイント以上上回ったものが、伊平屋島南部の砂嘴と景観、辺土名の沈水ビーチロック、比地の大アカギ、古宇利島トケーバル海岸、比地の大アカギで、5ポイント以上の差であったものが佐田浜海岸であった。一方、行楽客の選択率が観光旅行者の選択率を10ポイント以上上回った資源は平南川のター滝で、5ポイント以上の差異がみられたものはイジヌイヤーヤと安波のサキシマスオウノキであった。

第2回調査結果に関して、観光旅行者ならびに行楽客毎の選択率に5ポイント以上の差があったものが図2のbである。第2回調査結果において、観光旅行者の選

率が行楽客のそれを10ポイント以上上回ったものは、松田のメーガー、ユッピー浜とフパダチ浜であった。一方、行楽客の選択率が観光旅行者のそれを10ポイント以上上回ったものが、ワルーミ、川田のサキシマスオウノキ、久志有津川のヒラ滝、アボガマ、真喜屋のフクガー滝で、5ポイント以上の差があったのはスーパイワダグチであった。

両調査の結果から、県外在住者は海岸系の観光資源を好む傾向にあり、県内在住者は滝・河川・植物に関する観光資源を好む傾向が示唆された。このことは、それぞれの生活圏内の地勢、河川・滝や砂浜に隣接する海岸の希少性などが、選好に影響を与えているのではないかと推測される。

以上のように、全体的にはさほど差異はみられないが、個別の項目について属性や訪問目的により分類すると観光資源に対する選好に差があることが示唆された。

4. おわりに

本研究では、潜在的な観光資源に対する観光旅行者および行楽目的の来訪者の選好度を明らかにすることを試みた。その結果、沖縄本島北部地域においては、一般的に河川、植物、鍾乳洞を主な構成要素とする観光資源の選好度が高いことが明らかとなった。また、観光旅行者と行楽目的の来訪者では、観光資源に対する選好が必ずしも一致しない傾向が示唆された。

今後の研究課題としては、今回の調査では種々の制約によりサンプル数が限られていたことや街頭調査実施場所が一ヶ所であったことから、旅行形態の変化に合わせたサンプル収集や複数地点での街頭調査の実施、画像と概要を提示しての街頭アンケート調査手法の性質により調査対象とした観光資源が限定されていたため評価者の自由度がより高い方法^{18, 19)}による調査手法の応用、ならびに本調査で対象とした観光資源に対する所在地域の住民による評価と本調査によって得られた結果との比較による分析を行うことである。

謝辞

本研究は、平成22および23年度名城大学特別研究助成を受けて実施されたものである。本調査に際して、アンケート調査実施を快くご許可下さったやんばる物産株式会社に対し、ここに記して深謝する。さらに、名城大学平成23年度卒業生の浦大介氏、宮城知奈美氏、安里妃香利氏、上原沙也加氏、大城由貴氏、関谷里奈氏、知花賢氏、新里勝五氏、ならびに同平成24年度卒業生の山城興弥氏、上間蛭氏、名嘉眞美希氏、上原明氏には本調査の調査員として多大な協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

註釈

- 1) 観光研究の分野においては、一般的に、宿泊施設、レクリエーション施設、観覧・文化施設、案内施設など、観光のための便益を供する施設を観光施設としている。
- 2) 一般的に、観光地は狭義と広義に区分され、狭義の観光地は観光資源、観光施設、レクリエーション施設の単体または複合により観光活動の対象地のことであり、広義の観光地は観光地、宿泊（施設集積）地、レクリエーション地を包含する圏域的なものである。混同を避けるために、本稿においては、広義の観光地を指す英語のtourism (tourist) destination の和訳である観光デスティネーションをあてることとする。
- 3) 選択率 = 当該観光資源に対する回答数 ÷ 有効回答数
- 4) 観光旅行者の選択率 = 観光目的かつ当該資源に対する回答数 ÷ 観光目的の有効回答数
- 5) 行楽客の選択率 = 行楽目的かつ当該資源の選択数 ÷ 行楽目的の有効回答数
- 6) 様々な研究者によって「観光」の定義がなされているが、本稿においては小谷（1994）ならびに溝尾（2004）による定義^{13, 14)} から『自由裁量時間において、24時間以上1年以内に、居住地を離れ、自発的かつ随意的で営利を目的としない旅行』とする。

参考文献

- 1) 長谷政弘編著. 1997. 観光学事典. 同文館
- 2) 尾家建生. 2009. 観光資源とアトラクション. 大阪観光大学紀要. 9: 11-19.
- 3) 奈良繁雄. 1994. 観光対象と商品. 塩田正志・長谷政弘編著. 観光学. 同文館. 55-86.
- 4) 溝尾良隆. 2011. 観光学と景観. 古今書院

- 5) 須田寛. 2003. 新・観光資源論. 交通新聞社
- 6) 朱専法・溝尾良隆. 1998. 観光資源. 前田勇編. 現代観光学キーワード事典. 学文社.
- 7) 河村誠治. 2005. 観光資源開発の方向性. 長崎国際大学論叢. 5: 129-138.
- 8) 溝尾良隆. 2009. 観光資源と観光地の定義. 溝尾良隆編著. 観光学全集第1巻 観光学の基礎. 原書房. 43-57.
- 9) 岡本伸之・越塚宗孝. 1997. 観光対象と観光資源. 前田勇編著. 観光概論. 学文社. 42-49.
- 10) 俞炳強・廣瀬牧人・渡久地朝明. 2002. 沖縄における観光資源の評価情報に関する数量化分析. 産業総合研究. 10: 81-89.
- 11) 安里直美・糸満りえ・池田孝之・小野尋子・清水肇. 2005. 沖縄観光イメージの形成過程と風景の変容 - 沖縄らしさの風景に関する研究 その1 -. 日本建築学会大会梗概集. 205-206.
- 12) 糸満りえ・安里直美・池田孝之. 2005. 沖縄「らしさ」の風景に対する住民意識と地域景観形成の課題 - 沖縄らしさの風景に関する研究 その2 -. 日本建築学会大会梗概集. 207-208.
- 13) 小谷達男. 1994. 観光事業論. 学文社
- 14) 溝尾良隆. 2009. ツーリズムと観光の定義. 溝尾良隆編著. 観光学全集第1巻 観光学の基礎. 原書房. 13-41.
- 15) 田代豊・伊良皆啓・アリ, ファテヘルアリム F. 2011. 沖縄島北部地域における「大地の遺産」としての自然環境資源情報. 名城大学総合研究. 20: 39-45
- 16) 沖縄県観光商工部. 2011. 平成22年度観光統計実態調査報告書
- 17) 沖縄県文化観光スポーツ部. 2012. 平成23年度観光統計実態調査報告書
- 18) 大石洋之・村川三郎・西名大作. 2006. 被験者の自由記述に基づく地域景観の選考特性に関する研究. 日本建築学会環境系論文集. 599: 135-142.
- 19) 古賀誉章・高明彦・宗方淳・小島隆矢. 1999. キャプション評価法による市民参加型景観調査 その1 - 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 -. 日本建築学会計画系論文集. 517: 79-84.